

ウサミン、一位だって
よ

おフロディテ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第七回シンデレラガール総選挙。安部菜々がそこで一位になった。

それはアイドルファンだけでなく、様々な人に少しずつ影響を与えることになる。

アイドルを辞めたフリーター、商店街の小さな料亭、勉強中の大学生。

これは彼ら、彼女らの物語。

ウサミンの影で立ち止まったり歩いたりする脇役的な主演達の、小さな転機の物語。

目次

大山かえで	1
キューティーピンク	11
塚原恭弘	21
瀬川悟	30
武者小路友昭	40
百瀬千春	51
岩下かおる	59

大山かえで

私は彼女が一位をとる瞬間をテレビで見っていた。シンデレラガール総選挙。日本でもっともあついでアイドル達の、年に一度の大切な日。総選挙での活躍はアイドルとしてこれ以上ない誉れだ。スポットライトに照らされる彼女を見て、自然と手に力が入っていた。

アイドル安部菜々と出会ったのは八年前、大手出版社への新卒採用が決まったお祝いとして姉が連れて行ってくれた小劇場だった。当時の彼女は地下から大手事務所への移籍が決まったところで、新人として順風満帆とは言えないまでも素敵なスタートを切ったところだった。その姿が自分と少し重なって見えて、妙に親近感がわいたのを覚えてる。初めてアイドルのCDを買った。

アイドルウサミンがラジオに始め徐々に知名度が上がりはじめていた時、私は憧れのファッション誌に配属された。おしゃやかな同僚と楽しい仕事をする、なんて幻想は三日もたずに消えた。毎日市場に向いては流行となり得る物をさがし歩き、締め切りは波のように絶え間なく、いい加減なスタッフと世間を知らない年下のモデルに板挟み、家に帰れることも珍しいほど。何度もくじけそうになった。その度にウサミンに勇

気とパワーをもらってなんとか頑張ることが出来た。

『新しい企画、キミをチーフにするから。よろしく』

新部署に配属されて二年。編集長から大きな仕事を任された。素人投稿企画の立ち上げチーフに選ばれたのだ。もともともっていた秋フアッション特集との掛け持ちにはなつたが、なにより新企画立ち上げに成功すれば業界内での注目度が上がる大きな仕事だ。近い将来自分の持ち込み企画だつて通せるようになるかもしれない。有り体に言えば、この上ないチャンスだつた。

この頃、自分の中に新しい目標が出来ていた。それは自分の立ち上げた企画でウサミンとコラボすること。私の一番のアイドルは、順調にスターダムをのし上がってきていた。テレビでも取り上げられるようになり、世間が彼女に気がつき始めた、そう思わせる風が、間違いないく吹いていた。ウサミンと仕事がしたい。沈んだ私をいつも励ましてくれる彼女に、仕事で恩返しをしたい。その思いは日に日に強まっていくばかりだつた。

企画会議は難航した。

『素人投稿つて枠は決まってるんだよね。チーフはどういうの考えてるの』

『自分なりのコーディネートを写真で投稿してもらって、それを毎月グランプリ形式で発表する、とかですかね』

『えー、それって結構擦れてるネタですよ。よそで見たことあるっつーか』

『それを言うなら素人投稿って時点で手垢もんでしょ。チーフはそこをあえていくつて言ってるんじゃないの』

『それにしたって差別化はしたいよね。上も中継ぎ企画として考えてるわけじゃないんだろーし』

『SNSでバズったのを取り上げるとか』

『フアッション雑誌としてどーよ。下手に手を出すと誹謗中傷とかで面倒なことになるじゃん』

『SNSが下火になるかもしれないしね。臨機応変にマイナーチェンジできるような、長くしぶとく生きる企画に僕はしたい』

『色や値段、アイテムで制限かけてバトらせるのは』

『それ、テレビでやってるやつですよ』

『素人さんが投稿しなかったらどーすんの』

『サクラいれるとか』

『うわ、炎上待ったなし』

『ただの素人じゃなくて企業を挟むとか』

『なんか商業先行って感じしませんか』

『チーフこれどうすんだよ。開始八ヶ月後だろ』

『そもそもスケジュールに無理あるよな、コレ』

『まとめてくれるかな、チーフ』

『よろしくチーフ』

一寸先は闇とは、よく言ったものだ。

それからしばらくして、ウサミンが消えた。安部菜々が、ウサミンという設定を捨てたのだ。テレビに映る彼女はもう永遠の一七歳でも、ウサミン星からきた宇宙人でもない。ただの普通の、女の子になってしまった。それでも、安部菜々は仕事をする。見ている人を元気づけるため、病みごとは一切漏らさずに目の前の仕事にプロとして取り組む。その姿は、けれど、なぜか、見ていると苦しくなってしまうがなかった。

仕事は一向にうまく回らないまま二ヶ月が過ぎた。二度目の企画書も再提出になった。

『なにがいけなかったんでしようか』

編集長は私を静かに一瞥すると、

『キミの企画には共感がない。だからダメなの』

『共感ですか』

『そ、読者との共感。この企画に一番大事なことはそれだから。練り直しておいで』
練り直せと言うが、私にはもうさっぱりだった。デスクに戻る。仕事はもちろん企画だけではない。いままでと同じようにモデルの押さえやスタジオのスケジュール調整、ライターの前稿上がり回収など、多忙を極める。へこたれてなどいられない。頭を企画だけに専念したいのにできない。一つできないと全部ダメのように思えてくる。

『大山さん、校閲部にコレ持ってって』

はい。

『柄井さんの原稿回収まだ？』

まだできてないって。

『日暮里のスタジオつけないってどういうこと』

赤羽に代わりできるか聞いてみます。

『秋ファッションのほう、締め切り三日過ぎただけ』

もう少しかかります。

『チーフ。今度の会議いつだっけ』

明後日の十三時です。

『大山さん、佐藤さんいる？』

『大山、ちよっと』

『大山』

『かえではさ、もつと息抜きした方が良いよ』

姉はそうつぶやくと、半分以上残ってたジョッキを一氣にあおった。

六月。有休消化に実家へ帰省した日の夜。同級生の家でもある居酒屋の個室で、姉と呑み会だ。

『息抜きつつあって、抜く暇がないんだから。今日だって、やあつととれた久々の休みなんだよ』

『編集ってそんな忙しいの』

『忙しいってレベルじゃない。地獄だよ地獄。生き地獄』

実際、残業は当たり前、休みは二週に一回のペース。その上安月給でうだつも上がらない。ストレスは貯まる一方で発散させる場所もない。やりがい搾取もいいところ。

『お姉ちゃんはいいいね。保育士さんって、好きなことで生活できてさ』

『アンタだって好きなこと仕事にしたんだろーが。すいませーん、生おかわりです』

テーブルに申し訳なさげにのこっているゲソをつまみ上げる。しなびたこいつが自分と重なって見えた。惨めだ。

『私がやりたかったのは、こういうんじゃないかってさー』

『どんな仕事も、やりたいことだけじゃやっていけないんだよ』

『かもだけど、だけどー』

ぐりぐりとおでこを机に押しつける。嫌なことも、全部この机に押しつけられたら良いのこ。

『最近テレビ見てる?』

姉は視線を私に向けたまま枝豆をやけに上品に口へと運んだ。

『んー、見れてない』

テレビどころか、ラジオすら最近ご無沙汰だった。会議室とデスクを行ったり来たりしていて娯楽に触れる余裕がなくなってきた。気づかなかつたが、私生活がだんだんと仕事に浸食されていた。

『あの子、よくテレビで見るようになったよ。あんたの好きな、えつと』

安部菜々だ。

『ウサミンちゃん』

姉の言葉を聞いて、少し驚いた。安部菜々をウサミンとして認識していてくれたのか。

『ウサミン星のウサミン星人だっけ。なかなかぶつ飛んでるね』

『あー、うん。でも、もう止めちゃったから』

ウサミン星人は卒業したのだ。今の安部菜々は、普通のアイドルとして頑張っている。

『え』

姉は心底驚いた顔をした。そして、

『この間のNステ、ウサミンっていつてたけど』

『……は？』

おかしい、ウサミンはもう設定を捨てていたはず。しかし姉はスマホのワンセグを起動させると『やっぱし。ウサミンって言ってるよ。ほら』と画面を見せてきた。

そこには、確かにウサミンがいた。

あの頃、私を支えてくれたアイドルが歌っていた。踊っていた。輝いていた。

『なんで……』

ウサミンはあの日死んだと思っていた。死んでなかった。まだ、頑張っていた。心地よいリズムと共に懐かしいメロディーが鼓膜をゆらす。

彼女は、ファンのために、みんなの笑顔のために頑張るといつてくれた。

ウサミンと仕事がしたい。忘れていた夢が、再び胸の中で燃えはじめたのを、ワンセ

グを見つめて感じていた。

会議室に集まったメンバーの顔を一人一人覗いて、用意した資料を掲げる。じっくり考えてまとめなおした新企画の企画書だ。

『新しく企画を練り直しました。いかがでしょう』

一斉に手元に目を落とした。しばらくしないうちにつぶやきが漏れる。

『おしやれブランドシリーズ？ これは』

『自分のコーディネートを高級ブランドに見立てて投稿してもらうんです。近年の企画は安くておしやれが主流でしたけど、やっぱりみんなが憧れるのは高いブランドのモノだと思っんですよ』

『だから、ブランド？』

『はい。自己流ブランドで、自分なりに価格もつけてもらっんです』

『そこまでするの』

『そこまでするんです。そこまですないと、読者が楽しめません』

読者との共感がずっと引つかかっていた。私が読者だしたら。高校生の私はどんなファッショ誌を読みたかったのか。どんなファッションに憧れていたのか。考えて、やっと辿り着いたのだ。

企画はその後細かな修正を加えて編集長に提出された。完成した企画資料にゆつくりと目を通していく。そして、おもむろに口を開いた。

『良い企画になったな』

企画書は、見事採用された。

『……ありがとうございます』

『第七回シンデレラガールズ総選挙、栄光の第一位は安部菜々さんです！』

司会者の声と同時にスポットライトが彼女を抜いた。会場が歓声に包まれる。いま、多くの人が彼女を見つめている。あの日、小劇場でまばらな観客相手に勇気を与えていた女の子は、今ドームを埋め尽くす以上の人々の応援を集めている。彼女の本気に励まされた人間がこんなにもいることが証明された。

私は泣いていた。はじめて、他人の幸せをこんなにも喜べている自分がいる。

次に泣くのはいつか、彼女と仕事をする時。それまで、また頑張るから。

だから今日は目一杯泣いて、喜ぼう。

キユーティーピンク

アイドルを止めて三年がたった。

「桃木さん休憩入って良いよ」

ライン長が言い終わると同時にまっすぐ工場を後にした。コンビニへ向かう。

アイドルを止めてから三つ目の職場には、半年たった今でもまだ慣れない。東京のアルバイトを解約し実家に戻ってアルバイトで日々をつないでいるが、生きている実感があまりない。

弁当の棚から機械的にのり弁をとった。こう毎日毎日コンビニ飯だとさすがに味気ないが、かといって自分で作る気にはなれないのがどうも。

熱い日差しの中をなんとか逃げるように、食堂の磨りガラスをからだを通るギリギリに開けて滑り込んだ。だが、確かに冷房こそついているものの効きがいまいちなのか肌にまとわりつく空気が気持ち悪かった。

適当に空いてる席に座り弁当を開けたとき、向かいの席に大人しそうな女がきた。

「……、あいてますか」

答えずにいるのを肯定と捉えたのか、ゆっくりと腰をおろす。

「わたし、最近入ったばかりでまだ知り合いいなくて。同僚同士、よろしくお願いしますね」

言いつつ巾着袋から弁当箱を取り出す女に目をやる。黒髪はショートボブであまり手入れしているようにはみえない。体型は少しふつくら、悪く言うところ、自制出来ない証拠だ。アイドルなら失格。

「あ、わたし西木です。あなたは」

「ごつそさん」

さつさと食べ終わって席をたった。

喫煙室で昼休みを潰し、製造ラインに戻る。今の仕事は部品を流すレーンに異常がないか調べるもの。基本的にボーツと立っているだけで良いという一見してみれば非常に楽な仕事だが、その実退屈な時間が多い上にお給金も高くないため実につまらない仕事なのだ。

ハツキリ言っただけの今の方が有意義でないことは明確だ。一日の大半を寝ることと立っていることに費やす日々。成長があるわけでも、刺激があるわけでもない。このままではいけないことはわかっている。今こそ親のすねをかじって生活できているが、やがて親が退職すれば、親の年金を当てにするわけにもいかないだろうし、まして親が死んだ

らそれこそ家事を自分でせねばならなくなり生活が崩壊する。転職も考えるが、経験上惰性での転職にろくな結果は訪れない。今の仕事を続けた先に昇給が見込めるなんて保証はないのだけれど。それこそ惰性でこの仕事を続けたって意味はないのではないか。

そもそも現状を生活が成り立つてるとしてよいモノなのだろうか。平日は退屈な見張りのバイト。仕事に刺激もなく楽しみもない。かといって何か成し遂げたい理想があるわけでも、何か楽しみなことがあるわけでもない。ただ食べて寝て仕事へ行つてのサイクルを無難に続けていくだけ。生きているといって、良いのだろうか。

アイドルをしていた頃は、今以上に苦しい毎日だったけれど楽しかった。厳しいレッスン、少ないけど熱心なお客さん、共に高め合った仲間達。安定しない収入、見えない未来、加齢。

やめだ。若気の至り今の暮らしの方が良い。あの頃の自分は、あまりにも将来を顧みていなかった。今の方が、断然。
いつの間にか、終業時間になっていた。

「いっしょやーん」

作業服を脱いで帰路につこうとした背中に間の抜けた声がかかった。振り返ると、昼間の新人が駆けてくる。

「……何です?」

「ごっそさん、駅行きます? いっしょに帰りましょ」

「ごっそさんとは私のことか。現場で珍しい女ということでご近感を持たれているようだった。無視したら、後ろをびよこびよこついできた。」

「この職場、男の人ばかりで疲れますよね。わたし、女の人見つけて安心しちゃって」
夏が近いのためか、六時になってもまだ町並みが明るい。燃えるような夕焼けがまぶしくて、目を細めた。

「ごっそさんで、休みの日は何してるんですか? わたし、アイドルが好きで。最近、推しの子が一位とったんですよ。もう嬉しくて嬉しくて。あ、推しって言うのは好きな子ってことなんですけど」

つい足を止めてしまった。振り返ると、お世辞にもきれいなといえない女がヘラヘラしていた。

「アイドル、好きなの」

「はい! みんな良い子で、可愛くて」

「バカだろ」

みんな良い子で可愛いだって、笑えてくる。

「アイドルなんて、他人僻んで媚びてるような奴らばっかだよ」

「そんなこと……」

「アンタの推してる奴だって、どうせライバル蹴落として喜ぶクス」

「そんなことない！」

気がつくくと新人が目には涙をためて怒っていた。睨んできたので、睨み返す。

「ごっさん、どうしてそんなひどいこと言うんですか」

「事実だから。いつまでも夢見てんなってこと」

吐き捨てて、駅に向かう。後ろは振り返らなかつたが、角を曲がってもずっと睨まれている気がした。なぜだか腹がたつて仕方なかつた。

家の最寄り駅の一つ前で降りて少し歩くことにした。

街はすっかりオフモードで、飲み屋の周りにはわらわらと仕事終わりの人間があふれている。流れに逆らつて家に吸い寄せられるように足を動かした。

と、前に行く人がハンカチを落とすのが見えた。拾つて肩をたたく。

「あの、ハンカチ落とししましたよ」

その人は驚いた後すぐに頭を下げて、

「ありがとうございます。って、桃木？ 久しぶりだね」

ぱあと顔を明るくさせた。

「えっと、どこかでお会いしました？」

申し訳ないが見覚えがない。人違いではないだろうか。しかし、その人は少し寂しげに笑って、

「こういった方が良いか。キューティーピンク。私だよ、ハニーイエロー」

「……宮内？」

なんてことはない、かつてのアイドル仲間がそこにいた。

当時、金髪にケバケバだった少女は黒の髪を三つ編みにした大人の女性に変わっていた。

「ちよつと、話せない？ わたし、今帰りで」

私の誘いに、宮内は懐かしさの残る快活な声でこたえた。

「ちよつと私も、そんな気分だったのだよ」

「懐かしいね。もう三年だっけ」

「そんな経つつけ。いろいろあったから遠い昔みたい」

宮内もずいぶんおぼさんくさいことを言うようになったモノだ。私にとっての三年は、実にあつという間だった。

「アイドルやってた頃は、みんなキラキラしてた。今も、多分そんなに時は経ってないだ

ろうに、私たちは大きく変わった気がするな。桃木も、私も」

公園のベンチに腰掛けて話す。カラスが頭の上を飛んでいった。

「この間テレビで、総選挙やってるの見たんだ。すごいよね、安部菜々つて子がとつただけど、あの子私たちより年上って感じだった。頑張つたんだろうな。私たちも、頑張つたらあそこまで」

「やめてよ。私らは限界だった。あそこで解散で正解だった。もう」

楽しくなかった。

アイドルが、楽しくなくなっていた。あんなに好きで、憧れて、楽しかった毎日が、いつの間にか嫌で嫌で仕方なくなっていた。これ以上やったら、アイドルが嫌いになる。それだけは嫌だった。

宮内は、じつと私を見つめる。

「そうやって、アイドルから逃げたんだよね。うん、私も。間違いないなかつたと思ってる。けど同じくらい、もう一度あの頃に戻りたいとも思ってる。今度はあの頃とは違う、もつと別のやり方でやれる」

だめだよ。それじゃあダメなんだ。なにより、もう手遅れなんだ。今更復活するには、私たちは別々の道を歩きすぎた。

「そうだね。今の生活がある。個人の事情がある。簡単に戻るとか、言えなくなってる」

「なんだよ」

わかってんじゃねえよ。

宮内はお腹をさすって照れくさそうに顔を染める。それは夕焼けの赤なのか。それにしては夜の匂いが街を包みすぎている。

「私、子どもが生まれたんだよね。今日は旦那の実家に泊まっててさ、少し気分転換に散歩してたところで桃木に会ったんだよ」

とんでもないことを、さらりと言った。三年前、私の隣で踊ってた奴が、今は守るべき家庭を持っていた。

「私、今も幸せなんだよ。あの頃は懐かしいし、戻りたいと思う。おんなじくらい、今の毎日でも愛おしくて、幸せなんだ」

「……」

「桃木は？ 今、幸せ？」

幸せじゃない。

何にも、幸せなんかじゃない。

「……昔はよかったなんて、思っていないから」

宮内は何も言わなかった。遠くで電車が走る音が聞こえる。近くの家からカレーの匂いが漂ってきた。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

言い出したのはどちらだったのだろうか。足取りは重く、地面に張り付いて離れなかった。

どうして私だけ、と思うことが多々ある。

売れたあの子と売れずに終わった私は、何が違ったのだろうか。良いことをしたのに報われないと損をした気分になる。頑張った日々が、いつか役立つときが来ると偉い人が言った。でも、アイドルになれなかつたら意味がないのだ。私が憧れたのはアイドルだった。あの日々はアイドルのために捧げた日々だった。それがアイドル以外のところで役に立ったつても意味がないのだ。私は。

子どもに恵まれ、幸せな家庭をもったあの子と私は何が違ったのだろうか。あの子だって、夢に破れた一人だった。あの子が幸せを掴んだ一方で、私は一体何をしているのだろうか。つまらない人生になったものだ。うらやましいと思う自分が惨めで仕方なくなつて、悔しい。真面目で一生懸命は、結局損をする役回りなのだろうか。

薄暗い部屋で一人横になる。テレビをつける気にならない。逃げだどハッキリわかる。逃げて何が悪いと開き直っている。こう考えている時点で、何か後ろ暗い気持ちがあることの証明なのだと気がついているのに。

最近、夜は寝付けない。

「ごめんなさい」

翌日、新人が顔を合わせると同時に謝ってきた。

「なにか、気に障るようなこと言ってしまったんですね。本当に、ごめんなさい」

誠心誠意、謝っていることは誰の目にも明らかだった。だからこそ、腑に落ちない。

「なんで？　なんでアンタが謝るの」

悪いことを言ったのは私だ。コイツは何にも悪くない。なのに。

新人は頭を上げなかった。かたくなに、誤り続けていた。

「もう止めて。もういいから」

突きつけられるような気がした。私は変わってしまったのだと。

謝らなければならないのは私だ。誤っていたのは、私もだった。

私の何が悪かったのかわからない。何が変わってしまったのかも。けれど、確かに、

あやまり続ける彼女に自分を映して、何かを変えなければならぬと感じていた。

塚原恭弘

最近、悩みがつきない。

運動不足からか下つ腹が出てきた。

隣町に出来たショッピンモールのおかげで客足が遠のき売り上げが落ちている。

老眼鏡を手放すことが出来ない。

しかし、何より困っているのは、もうすぐ二十になる息子が口をきいてくれなくなつた。

高校に入ったあたりから口数が少なくなってきた気はしていたが、大学生になってからというものの、家でまともな会話が出来ていない。

「なんだよタカさん、浮かない顔してるね」

常連の上島さんが、昼間つから生のグラスを傾けながら聞いてきた。この時間帯はいつもこの人しかいない。

「いえいえ、たいしたことじゃあないんです。家の話で」

「なんだよ、俺にやあ言えねえつてのか。水くさい」

言えるわけがない。いくらご近所同士で仲が良いからとはいえ、あくまで客と料理

人。まして息子と話が出来ていないなど。

反抗期、という奴だろうか。少し寂しい。昔は父ちゃん父ちゃんと駆け寄ってきてはいつしよに遊びたがっていたのに。成長した証と言えばその通りなのだけれど。

息子の隼人が八歳の時、妻が他界した。それからはずいぶん悲しむ暇もなく育児に追われる毎日。親一人子一人で、周りの家庭よりも隼人にずいぶん大変な思いをさせたと思う。その分、周りの家よりも親密な関係を築けてきたはずだ。だからこそ、息子の変化は寂しくて、辛い部分が大きかった。

夜十時に店を閉める。のれんを片付けて、奥の自宅へと引つ込みまっすぐ仏間へとむかった。若く美しい妻の写真に手を合わせる。

今日も一日、なんとか働いたよ。客足は遠のいちやつてるけど、暮らしてはいけてるから、心配しないで欲しい。隼人が最近、ツンとしてるんだ。反抗期なのかな。僕はうまくやっていけるのか不安です。どうしたらいいかな。

開けっぱなしの窓から流れ込む夜の音が、薄暗い部屋全体を包む。隣の家から楽しげな声が聞こえた。

「君だったら、なんて言うのかな」

力ない言葉が口について出てしまった。

子育てにはパワーがいる。自分よりも優先したい人がいる感覚は、隼人が生まれる前

には予想出来ないものだった。隼人ももう大学生、親の手を離れる時期と言えば時期。隼人が独り立ちをして、家にひとりぼっちになる時も近い。だからこそ、それまでの間は隼人と親子としての関わりを少しでも増やしたいのに。

隼人は今頃、部屋で何をしているのだろうか。好きなことをしているのだろうか。好きな人の好きなことを知りたいと思ったのは、ずいぶんと久しぶりのことだった。

「ふふふん、ふふふふん。ふふふん、ふふふふん」

翌朝、厨房で今日の仕込みと朝ご飯と隼人の弁当を作っていると、隼人の部屋のほうから楽しげな鼻歌が聞こえた。トントンとリズムカルな足音が近づく。

「おはよう隼人、朝ご飯、出来てるぞ」

にっこりと笑顔を見せる。コミュニケーションの基本は笑顔だ。

隼人はじつと僕を見つめて、

「いらない」

とだけ言うのと弁当を乱暴に掴んで玄関に行ってしまった。朝ご飯作戦、十連敗中。

「料亭むつみ」は地域に愛される定食屋になった。義父の代から次いで二代目の店は、開業五十年になる。毎朝知り合いの農家さんから新鮮な野菜を仕入れ、リーズナブルなお値段で美味しく優しい料理を提供する。ご飯を食べて元気になって店を出るお客さん

を見ると、単純だけど嬉しくなる。本当にやりがいのある仕事だ。

この店は妻の父の店だった。それを夫婦でもらい受け、今は一人で看板を守っている。義父もこの世を去り、店を守るのは一人だけ。こちらの業務をおろそかにしては、天国の二人に合わせる顔がない。

息子の件は気がかりだが、なるべく顔に出さずに頑張るのだ。

午前中にちらほらやつてくるお客さんを捌いて、昼休憩。隼人のといっしょに作っておいたお弁当を食べる。

客足が遠のいているのは、本当に悩みの種だ。このままではいずれ経営が悪化して、店を続けられなくなってしまう。人生百年とは言うが実際に働けるのは後三十年だ。せめてそれまでは店を続けたいのだが。高校を出てそのまま飛び込んだ料理人の道。経営のノウハウとやらがめつきり理解出来ないのも、悪化を止められない原因なのだろう。情けないが、勉強に充てられる時間が少ない。コツコツ独自に学んではいるものの、果たして間に合うのだろうか。

昼休憩を終えて再びのれんを出すと、待つてましたと言わんばかりに上島さんが顔をだした。

「おうタカさん、元気かい」

「ぼちぼちですよ。いつものですか」

ひょうひょうとつかみ所のない雰囲気は、しかしずいぶんと安心してしまう。上島さんのいつもののは、鯖の味噌煮定食だ。

「ビールもつけといて」

「また昼間からですか。少しは健康にも気を遣つてはどうぞです」

「タカさんまでそんなこと。大きなお世話ですよ。俺の体は一番俺がわかつてんだ」

冷蔵庫から冷えた瓶を取り出して出す。嬉々として栓を抜き、グラスに注いだ。

「ふふふん、ふふふふーん。ふふふん、ふふふふーん」

と、聞き覚えのあるメロデーを口ずさんだ。

驚いて、味噌煮を作る手を止めて上島さんを二度見する。

「上島さん、その曲……」

「へ、ああ、長女がアイドルにはまってね。四六時中流してるもんだから、つつい俺

にも移つちまったんだよ」

アイドルか。もしかして隼人もそのアイドルが好きなのかもしれない。コレが、会話

のきつかけになるかも。

「上島さん、そのアイドルのこと詳しく教えてくれないか」

「は、なんで」

「ビールも一本おまけするから」

そのアイドルは、安部菜々というらしい。インターネットで調べるといろいろな動画やプロフィールが出てきた。

今時の子には珍しく、自分で十七歳を名乗っているそうで、何でもウサミン星の宇宙人なのとか。平成初期のアイドルの懐かしい匂いがした。映像をみるとポロポロの体、若い世代とのギャップが見え隠れしていたものの、プロとして、アイドルとしてあり方では、素人目から見ても立派だと感じさせる強さをもっていた。隼人がこの子に入れ込んでいるというのも頷ける。思い出したのは三十年前。大学を出たばかりの妻と共に、アイドルのコンサートにいったこと。あの頃は今と違ってアイドルがたくさんいたわけではなかったが、今以上に上昇志向にあふれている気概がある人ばかりだった。妻も、そんなアイドル達が大好きだった。

「君の子だよ、やつぱり。こんなところが似ているか」

今日は、少し早めに店を閉めた。

夜七時、隼人は決まってこの時間に帰ってくる。晚ご飯を用意して待つ。

玄関ドアが開く音がした。のす、のすと歩いてくる音。リビングの扉が開いた。

「おかえり」

僕を目にとめて、隼人が怪訝な顔をする。

「……何でいるの。まだ店の時間だろ」

「ちよつとね。久しぶりに隼人と飯でも食べようかなつて」

テーブルの上の料理を指す。隼人はそれを一瞥すると、きびすを返してリビングから出て行った。

やっぱり、厳しかったか。

テーブルの下に隠した音楽プレーヤーを見つめる。今日は、張り切ったのだけれど。バタン、と再びリビングの扉が開いた。そこには仏頂面の隼人がいる。僕が唾然として見つめていると、隼人はぼつの悪そうな顔で、

「手、洗ってただけだから」

目の前の席を引いて腰を下ろした。

小さくいただきますと呟いて黙々とご飯を食べる。僕も、つられて食べる。

食べながら、悩んだ。久々の会話、どうははじめれば良いのか見当もつかないのだ。

早速本題に入ってしまうか。いや、がつつきすぎてもひかれてしまうし、かといって当たり障りのない話題をするのはちよつと。

「……隼人、学校は楽しいか」

「ぼちぼち」

「と、友だちは」

「ふっー」

「今日のお弁当どうだった」

「いいんじゃない」

会話が全く続いてくれない。どうしよう、どうすれば。

そんなとき、ふと天国の妻が背中を押してくれているように感じた。なぜだろう、何の根拠もないのに、いまなら上手に話せる気がしてきたのだ。

「隼人、父さん最近な、アイドルに興味がわいてきたんだ」

「……へえ」

「安部菜々ちゃんって子なんだけど、可愛くて好きになっちゃったんだ」

「どうかな、と話題を振る。返答が帰ってくるまでずいぶんと長い時間があつた気がした。そして、

「オレも好き」

隼人が、まともな返事をくれたのだ。

「好き？ 好きなのか？ どの辺が好きなんだ。父さんは歌がとても好きで」

「仕事の様か、かつこいいんだ」

「やっぱり、それもあるよな。父さん、久しぶりにアイドルを見たんだけど活性化されちゃったよ」

いつぶりだろう、会話が続く。会話がとんでもなく楽しい。もつともつと、話していたい。

その晩は隼人と二時間話した。数年ぶりの二時間は、まるで一瞬のようであつという間で、一日のように長かった。

隼人がお風呂に入っている間、仏壇に手を合わせる。

なあ、隼人は優しい子だったよ。今日は久々に話をしたんだ。親子水入らず、本当はキミにもいて欲しいのだけど、濃密な時間が過ごせた。

いつか、僕もキミのところへ行く日が来る。でもその日まで、一瞬一瞬を大切にしていようと思うよ。

顔を上げると、庭先のラベンダーが風で揺れた気がした。

瀬川悟

事件はサービスエリアで発覚した。

「のの子が消えた!?」 いつ、なんで?」

「わからないわよ! 目を離れた隙に消えてて……。友だちの家にも行ってないみたいだし、それに財布もなくなってる。あなた、心当たりないの?」

清恵が今にも泣き出しそうな声で聞いてくるも、とんと見当がつかずむしろこつちが泣いてしまいたくなる。

「君にわからないこと、俺にわかるわけないだろ」

「なに無責任なこと言ってるのよ! 心配じゃないの!」

「心配に決まってるだろ! ああ、とにかく、俺もすぐそっちに戻るから」

「戻るって、あなた今日名古屋じゃ」

「行ってる場合じゃないだろ。じゃあ、一旦切るから」

半ば強引に電話を切った。

途端に、焦りと不安がどつと押し寄せて来て頭がクラクラしてくる。思わずその場へあたりこんでしまった。

のの子は、清恵との間に生まれたたった一人の愛娘だ。幼い頃はパパ大好きと甘えてくる本当に可愛い子だった。けれど小学校に上がってからは仕事の忙しさにかまかけており構ってやれていない。情けないことだ。こんな時に、あの子が普段向いそうな場所ひとつさえ思い浮かばないなんて。

「あの、大丈夫ですか？」

へたり込んでいた為心配してくれたのだろう。青年が声をかけ顔を覗き込んでいる。いけない、こんな場所で混乱している時間の余裕はないのだ。

「ああ、すいません。ちよつと娘が迷子でして」

しまった。口を滑らせてしまった。

青年は驚いて目を見開く。

「大丈夫ですか？ どこら辺ではぐれたんですか？」

「あ、いや、ここじゃないんです。家の近所でいなくなつたみたいで。余計な心配をかけてしまいました」

青年はラフなTシャツにウサギのロゴがプリントされた鞆を持っている。きつと楽しいお出かけの最中だったに違いない。それなのに、いらぬ心労をかけてしまったのではないのか。そう思い謝る。

「いえそんな。でも、確かに心配ですね。今から家へ？」

「はい。静岡まで戻ろうかと」

「静岡って、ここ名古屋ですよ!？」

「大丈夫です。なんとか戻れますから」

俺が強そう言ったので、相手は引き下がりながら顔には明らかに心配の色を浮かべていた。

「それじゃあ、お気をつけて。娘さん、見つかるの良いですね」

「はい。それじゃあ失礼します」

そう言い残して逃げるように車へ乗り込んだ。

深呼吸して、鍵を回す。深呼吸は良い物だ。少なからず心を落ち着かせてくれた。落ち着いた頭に浮かんできたのは、一つの疑問。本当にの子には消える予兆はなかったのだろうか。車の空調を感じながら、今朝のの子を思い出していた。

「パパ、今日もお仕事なんだ。ごめんね」

俺はそう言ったが、のの子は全く納得出来ていないようだ。頬を膨らませて腕を組みそっぽを向いてしまう。ふてくされてる顔が少し清恵に似ていて、申し訳ないが愛おしく思えた。

「いつもお仕事じゃん。ヨシちゃんのパパは動物園に連れてつてくれるって言った

よ」

「他所は他所だから。パパも、のの子やママがご飯食べられるように一生懸命働いてるんだよ」

「知らない知らない知らないもん!! パパ私嫌いなんですよ! もういいから!!」

そう言って、のの子は奥に引つ込んでしまった。

入れ違いにキッチンから顔を出したのは清恵だ。

「……あの子も、本気じゃないのよ。ただ、ちよつと構って欲しいだけなの」

「仕方ないだろ、仕事なんだから」

「仕事も良いけど、家の事も考えてよ。最近全然起きてるときに会えないじゃない」

「家事は手伝ってるだろ」

「そういうこと言ってるんじゃないの。もっと私達との時間を大切にしてほしいの」

清恵は良い妻だ。家の事を俺より沢山担ってくれて、今だって言いたいことがあるだろうに、言葉を選んで話してくれる。でも、俺だって必死なのだ。

「また夜、時間見つけて話し合おう。とりあえず今日は行ってくるから」

腰を上げて、最後に確認する。財布に携帯、定期……。

「あれ? 手帳がない」

何度も服を叩いて確認したが、間違いない。手帳がなかった。振り返って清恵に聞

く。

「なあ、俺の手帳知らない？ スーツに入れっぱなしにしてただけだ」

「知らないわよ。スーツ私触らないじゃない」

「困るな……、スケジュールとか必要なこと全部アレにメモしてるのに」

少し責めるような言い方になってしまった。管理しているのは俺で、だからなくした責任は間違いなく俺にあるのに。寝室に落ちてはいないかと中に戻って探すも、やはりない。

「おかしいな。昨日は確かにあったはずなんだが」

首をひねっていると、清恵が何か思いついたのかそそくさと奥の居間へと移動し、しばらくもしないうちに戻ってきた。

「今朝、あの子寝室を漁ってたのよ。何のつもりだと思ってたけど、やっぱりね」

その手に持っていたのは俺の手帳だ。

「のの子のいたずらか。困るな」

受け取ろうと伸ばした手が、空を切る。疑問に顔を上げると、苦い顔をした清恵が「なんでもない」と渡してくれた。

一体なんなのか、わからなかったが、何も言わずに家を出た。

嬉しいことに結婚し、家庭を持つことができた。けれど、今仕事に追われて家庭をないがしろにしていると言われても仕方がない生活を送っている。

家庭を大事にしたいのはやまやまだ。けれど、働かなければ生活が成り立たない。仕事の手を上げれば今後に響く。かといって仕事のせいで家に帰れないのはすごく悔しい。

自分は結婚に向いていないのだろうか。家庭など持つべきではなかったのだろうか。良い父親は、妻を労い、子の面倒を積極的に見て、家のことをやる人らしい。俺には無理だ。そんな時間ない。けれど、いつまでも清恵に頼り切りじゃあ、いつか愛想を尽かされてしまう。

今日だって、その前兆ではないのか。のの子がいなくなっても、俺は大した力にならない。どうして俺はこんなにも無力で、どうしようもないんだ。深い後悔が、どうしようもなく。

窓ガラスが叩かれて、顔を上げる。そこにはさっきの青年が顔を覗かせていた。

「あの、どうかしましたか」

疑問を言うと青年はおずおずと。

「その、やっぱり心配で。一度名古屋駅へ向かうのはどうでしょう。そうすれば電車で静岡まで行けるので安心ですし」

青年はニツコリト笑って、気をつけてと言葉を続けた。

名古屋駅に向かったのは、青年の言葉もだが、自分の運転が不安だったことが一番にあった。降りて、駅構内を急ぐ。

まだ時間は早かったが、家族連れの様も沢山見えて、辛い。の子と同一年ぐらいの子供と手をつなぐ彼の姿に自分を重ねる。だが、その幻想はすぐに消え去っていった。自分がああだった日は、なかったではないか。

今日は電車を使うつもりがなかったので、ICカードを持って来ていない。仕方がないので券売機の列に加わったところで、向こうから見慣れた顔が歩いて行くのが見えた。

信じられない人間がそこにいた。まさか、そんな。だが、あれは。

「の子ー」

駆け出して、すぐに追いつく。名前を呼んだ彼女はこちらを振り向いて、顔をぱあと明るくさせた。

「パパー！ いたー！」

すぐさま力いっぱい抱きしめる。応えるように、の子も俺を抱き返した。

やがて、顔をしっかりと見据えると、の子はバツが悪そうに目をそらす。俺の顔がよ

ほど真剣で怒られると察したのだろう。

「心配したんだぞ。どうしてここにいるんだ」

「……電車乗ってきた」

手段を聞いたわけではなかったのだが。俺を追ってきたのは、多分間違いない。今朝手帳を見ていたのもそう思うと合点がいく。それにしたって、なんて行動力だ。子供が父親を乗って県境を越えるなんて、俺には想像がつかなかった。

「一人で来たのか？」

そう聞くとこの子は静かにかぶりを振って後ろを指さした。見ると、二人の男性が少し後ろから優しい色を目に浮かべて見守ってくれていた。つい、警戒してしまう。

「もしかして、この人達に連れてきて貰ったの？」

「ううん、違うけど。でも、ここで下りた後、一緒に歩いてくれたよ」

「迷子センターに送ろうと思って」

勘違いされないように後ろの人が言葉を加えた。見ると、先ほどのサービスエリアで会った青年と同じウサギのロゴが入ったシャツを着ていた。

のの子にお礼を言えと促して、二人と別れた。『お父さんと会えて良かったね』と、そう笑って二人は去って行った。何かお礼をさせてくれと頼んだのだが、させてくれなかった。

セクハラ、児童売春、成人男性が小学生女兒に声をかけるのが躊躇われる時代に良く勇気を出して娘に声をかけてくれたと思う。のの子になにかあったら、今こうして帰れていなかったかもしれない。素直にありがたかった。

車で帰路につく。道すがら、のの子と話をした。

「どうしてママと来なかったんだ」

「……だって、ママもパパも忙しいから、邪魔しちゃ行けないと思ったんだけど」

「それは」

気を遣わせてしまったと言うことなのか。子供に。

情けないことこの上ない。俺はいつも、いつも。

「パパはいつも頑張ってるよ！ とってもエライ。ママも、パパも、凄い頑張ってる私のアイドルだよ」

のの子は、俺がショックを受けたのを察してか、フオローをしてきた。

「お兄さん達言ってた。頑張ってる人は、いつも大変なんだって。だから、頑張ってる人には頑張ってエライって言うの！ 私が支えたら、頑張ってる人達はもつと頑張れるようになるからって」

のの子は続ける。

「お兄さん達もいつもしんどいんだって。その度に、アイドルに勇気を貰ってるって。自分なりに一生懸命頑張ってる、アイドルに元気を貰った分はまたアイドルに返してあげてるって」

自分は、返せていない。何も、家族にしてあげられない。

「ウサミンって子が好きなんだって。その子を応援してたら、その子は一位になったんだって。今日はそのライブなんだって。私、私……」

そして、ついにのの子は叫んだ。

「パパがそんな顔してるのいやなの。いっぱい私はパパから幸せ貰ってるのに、パパが幸せじゃなくちゃダメなの!!」

ハツとした。そうか、俺はそれを見落としていたのか。俺は、そうか。のの子の前でどんな顔をしていたのだろう。

「……ありがとう、のの子」

何も解決していない。何も好転していないし、何も出来るようになっていない。だが、それでも今すべき顔はわかった気がする。

明日は休みを取ろう。そして家族と向き合ってみよう。そう考えながら、俺はアクセルを踏む。

武者小路友昭

安部菜々か、もう覚えたぞ。今に見ている、僕は今日の屈辱を決して忘れない。

僕は小説家だ。主に平安時代を舞台にした歴史小説を書いて生計を立てている。ありがたいことにそれなりに収入を得られ、ファンも少なくない。

キャリア十年、最新作『新白俱利伽羅秘法伝』はこれまでの集大成となる作品になった。自分で言うのもなんだが、傑作だと思う。書き上げた瞬間、僕はこの作品を書くために生まれたのだと考えたほどだ。

そしてこれがあながち間違いでもなかった。まず時代小説協会の大賞に選ばれた。候補作の中には、自分よりキャリアのあるベテランや、今勢いのある若手もいた。その中で自分の作品が選ばれたことはとても喜ばしく誇らしいことだった。しかし、大賞を取ったこと自体は実はそれほど驚かなかった。

本屋大賞もありがたいことに頂いた。この賞は歴史小説というジャンルに縛られず様々なジャンルの傑作が集まってくる。ミステリ、恋愛、ジュブナイル。その中で僕の作品が選ばれたことはとても嬉しく、そしてやはり自分の小説が傑作なのだという確信

も得られた。

その喜びを祝うパーティーを開いていたところへ編集から一本電話が入った。電話に出ると、向こうはとても焦っているようだった。

『おやおや、これは担当の某ではないか。僕は今、気の置けない友人を招いて本屋大賞おめでとう会を開いているのだが、今日はとても気分が良いから、君がくることもやぶさかではないよ』

『先生、それどころじゃないツスよ……。お、落ち着いて聞いて下さいね』

『落ち着いてとは大層な言い方だなあ。協会賞貰ったときも、本屋大賞とったときも、僕はいっただって落ち着いていただろう。今更何を驚けと言うんだい。今なら、ティラノサウルスがバンジージャンプしたって驚きやしない自信がある』

『……あの、酔ってます？』

『これっぽっちで、お酒を飲んだなんて言わない！』

『酔ってんじゃないですか!!』

全く失礼な奴だ。昔からこういうオツムの硬いところが氣にくわないのだ。

編集はもう一度『落ち着いて下さいね』とくどい前置きをしてこう言った。

『直木賞、候補にノミネートされました』

この報せは僕をたいそう驚かせた。まるで天地がひっくり返り、突然スカイダイビン

グの直前へと移動させられたような衝撃が走った。平たく言うとな腰を抜かした。まさか、それほどは。

本屋大賞と直木賞は相反する賞と言って過言でない。本屋大賞の創設が、そも直木賞で選ばれる小説と読者が求めるエンターテインメントとの隔離を危惧して、読者にもつと寄り添った小説賞をという理由があつたため、この二つで同時にノミネートされるのは、とてつもなく難しいのである。

僕は柄にもなく喜んだ。実家に吉報をもたららし、友人を私邸に招き——と言つても、大した住まいではないのだが——祝宴をあげた。

他の誰かに僕の感じた幸福が理解出来るだろうか。いやきつと出来ない。なぜならばこれほどまでの大傑作を書ける人間など、この世にほとんど存在し得ないのだから。そう、幸せなはずだったのだ。幸せな。

祝宴の翌日、二日酔いが確かにあつたはずなのだけれど、僕は元気に目を覚ました。窓の外が自分をお祝いしてくれている気がした。

ウキウキ気分が階下に向い、いの一番組にテレビをつけた。きつとどの局も僕の本の話題を少なからず取り上げるだろう。それほどに素晴らしい傑作を僕は書いたのだから。

朝のニュースが昨日の話題を取り上げていた。

『第七回シンデレラガール総選挙が昨日行われ、安部菜々さんが見事一位に輝きました』
僕の話題ではなかった。

……まあ、焦ることはない。いくら僕の小説が傑作で、色々な名誉ある賞に選ばれたとしても、他にも生活はあるのだ。当然一日中僕の話だけしているわけにはいかない。今はタイミングが悪かっただけ。他の局ならばと、チャンネルを変える。

『七回のシンデレラガールに、あのアイドルが選ばれました』

『今回の一位、安部菜々さんの魅力に迫ります』

『ウサミンが番組に来てくれた秘蔵映像を振り返り』

『昨日、芥川賞、直木賞の候補作が発表されました』

これだ！ あった！ いやはや全く焦らしてくるじゃないか。タイミングがあつたぞ。さてさて、インタビュートかこれから来るのかしら……？

『今回選ばれた五作の内、注目は本屋大賞にも選ばれた『新白俱利伽羅秘法伝』ですね』
そうだよ、僕の傑作だよ。さてどんな風に取り上げてくれるか——

『続いてのニュースです。鴨の赤ちゃん、大行進です』

本当に少しだった。

……タイミングが合わなかったただけだよな、多分。

別に特になんにも理由はなかったが、なんとなくテレビは消して朝食をとった。

一張羅に着替えて、街へ繰り出す。目指すは近くの本屋だ。なぜならば、本屋は間違いないく僕の特集を組んでしかるべき場所だからである。

と、その前に僕は手近なコンビニへ寄った。

入り口右手にある新聞ラックから、適当な一紙を取り出す。開いて、僕の名前を探した。新聞は比較的年配や社会人に向けて書かれている節がある。小説の話題も漏れなく記載されているはずだった。

『山芋泥棒、近所の小学校教諭』

『今年の顔は誰だ？ シンデレラガール総選挙結果発表』

『日経平均株価久々の三万円台。日米間の関税が影響か』

なかった。なぜなのか。一応他の新聞も見てみたが、なかった。どうということなのか。

本屋に着く頃には、太陽が刺すように体を照らしてきていた。空調の効いた店内に入る。本屋はいつも良い。店内の落ち着いた雰囲気は僕の心を静めて――

『第七代シンデレラガール・安部菜々さん推薦コーナー!!』

ピンクの派手なポップがあったような気がするが、気のせいだろう。

ハードカバーの本が置かれたコーナーへ急ぐ。特集は……あ！ あった！

今年話題の外国ミステリの横に僕のコーナーがあった。本屋大賞、直木賞の傑作。武者小路友昭先生コーナー、か。うふふふ。少し小さい気がするけれど、いやあ、僕もこうして取り上げられるようになってしまったのか。ふふふ。

『話題のアイドル推薦書。本を読もうフェスタ』

隣に妙なコーナーが存在などしていない。そのコーナーが僕のコーナーよりも大きいわけがない。断じて、ない。

クソ、クソ、クソ！ どうしてなんでなにゆえに！ 僕じゃなく安部菜々なるアイドルがそこかしこで目につくんだ！ いくらなんでも、なあ、それはちよつと、ズルくないだろうか。確かに一介の歴史小説家よりもアイドルの方が注目度が高いのは理解出来る。だが、僕の傑作は他に六つも先例があるわけではない偉業なのだ。せめてトントン、もう少しだけで良いから注目してくれてもいいじゃないか。そう考えて何が悪い。家に帰り着くと真つ先に親友に電話をかけた。二回のコールで相手は出た。

「久しぶりだな！ 聞いたよ、今度は直木賞だつて？」

「田中くん、なして皆僕のこと褒めてくれんの？」

「おいおい、まさか落ち込んでいるとは……」

田中は僕の話の話を黙って聞いてくれた。少しだけ考えて、こう答える。

「色々言えることはあるが、まあ、簡単に言っちゃうと、考えすぎてやつだな」

「そがな?」 僕、全然皆気にしてない気がすんねけど」

「そんなわけないだろ、つたく。ニュース見てもお前の名前ばつかだぜ。ネットも大盛り上がり。そりや、確かにウサミンも話題だけだよ。お前の言うほど、そつちばかりフィーチャーはされてねーよ」

田中はあつげらんかんとしていて、余計に不安になってしまう。彼が慰めるための適当な嘘をつくような人間でないことはわかっているのだが、どうしても信じられないのだ。

僕の納得しない様子が伝わったのか、電話口から溜め息が漏れてくる。

「何が気に食わないんだよ。お前もちゃんと評価されてるし、もちろんウサミンだつてめでたい日なんだよ。お前ばつかりつてわけにはいかないだろ。そう言うやつかみは、あんま良くないと思うぞ」

それは、わかっているのだ。

僕はアイドルに詳しくない。だから、シンデレラガール総選挙というのがどれほどの栄誉なのかはわからない。

けれど、それは並大抵の努力では掴めない誉れであるのは嫌でもわかる。そうでなけ

れば、これほど色々な媒体取り上げられるわけがない。奇しくも、それは僕がよくわかった。

もしも逆の立場だったら？ ……想像するまでもないことだ。

でも、だけど……。

「僕な、傑作書いてん」

「そうだな、客観的に見ても、今回の小説はそうとう出来が良かったみたいだな」

「そうなんよ。めっちゃめっちゃ筆がのつてん。今まではさ、書いてる途中に少し不満があつて、書き上がった後も気になるところが尽きなかったけど、今回は最初っから最後まで最高やつてん。もう二度と書けんほどの傑作なん」

「……なら、なおさらその傑作を汚すようなことしちやダメだろ？」

「傑作だから！ だから、今しかないんよ」

これは、まだ誰にも言つてないことだった。

「田中くん、僕ね。今小説が書いてないんや。ネタもそうやし、文字が全然出てこうへんのよ。とんと、とんとね」

傑作を書き上げた直後から、その兆しはあつた。ワープロの前に向き合つても、文字が一つも浮かばないのだ。根本から浮かばなかった。今まで培つたテクニクで誤魔化して書こうとするも、それすらも出来ない。

少し疲れているのかと一週間キツチリ休んだ。けれど、ダメだった。

なにか自分の根っこの部分で小説を書くという行為が阻害されているような、そんな感覚。

「焦ったよ。だって書けんのやもん。僕は小説家なのに、その小説が書けなくなったらもうどうすればいいん？ 新作は皆凄いつて褒めてくれて、したらどんどんそれがプレッシャーに変わって。書かな書かなと思っても、全然書けなくて。だったらこれだけでも注目してくれて、売れてくれな。僕この先もう……」

後半は涙になって声が出たのかすら怪しい。

ここ数ヶ月溜まっていたモノが、あふれ出ていた。もう、自分にはどうしようも出来ないほどに膨れ上がったものが、形になった気がした。

気がついたときには泣いていた。僕は、泣いていたのだ。

田中はまた少しだけ黙ると、こう言った。

「それこそ考えすぎだ、バーカ」

突然の罵倒に、脳みそが追いつかず思わず黙ってしまった。耳を澄ませて続きを聞く。

「いいか。良く聞いて胸に刻めよ。この世の中でな、お前に期待している人間なんてな、

ほとんど、いないんだ!!」

……いやいや。

「なにそれ。なんでそんな酷いこと言えるの？ 僕が誰からも期待されてないなんて」

「誤解すんな。ほとんどいないつつたんだ。そうだな、具体的に人間を挙げるとすればお前の親父さんとお袋さん、後はせいぜい大甘採点でかろうじて俺か。三人だな」

「……似たようなもんじゃん」

「全然違うね。お前は何も気負わなくて良いって事だよ。なんせ、たった三人分の期待だけ応えれば十分なんだからな。しかも、その期待も大甘ときたんだ。人生イージーモードだなチクシヨウ」

「よくわかんない。なにが言いたいんよ」

田中は何を伝えたいのか。僕にはいまいち掴みきれない。田中はこう言った。

「いいか。お前は確かに今回傑作を書いたのかもしれない。それをウサミンに奪われそうで怖いんだろ。仕方ねえよ、ウサミン可愛いもん」

「裏切り者」

「まあ聞け。俺が言いたいのは、怖がる必要なんてなんにもないってことだよ」

怖がる必要がない？ どうして。

わからなかったけど、田中はまったく嘘をついている風でもからかっている感じでも

ない。

「俺と両親さえ楽しませりや、お前の仕事は十分つてことだ。だつて誰も期待してないんだもん。今まで通り、好きなように書きやあ良いんだよ。難しいことごちやごちや考えて、次も面白いもん書こうとする必要ねーよ。小学校の感想文と同じでいいんよ」

なんだか田中の言い方があつさり過ぎて、ハッキリ言うのと拍子抜けしてしまつていた。どうしようもないほどの感情が、体中から抜けていくような感覚があつた。

「気負うな気負うな。マイペースマイペース」

田中はゆっくり背中を押してくれる。なんだか、少し元気になつていた。

「ありがとう田中くん、僕、なんだかやれるようになった気がする」

「おう、ならいいんだ」

電話を切つて、息を吐く。

そうしているとふと、新しいアイデアが浮かんできた。

パソコンをつけて向き合う。自分と、もう一度。

けれど諦めたわけではない。僕はもう一度、傑作を書く。その時、僕は自信を持つて自分の傑作と向き合っているようになれているのだろうか。

それは傑作を書き上げるまで、とんと見当もつかない。

百瀬千春

「ねえ、何聞いてるの？」

問いかけに意味はない。ただ、次の時間までの休み時間にたまたま暇が出来ただけだった。

隣の席の彼と、特に仲が良かったわけではなかったけれど、気まぐれに声をかけてしまったのだ。

彼は驚いた様子でイヤホンを外すと、少し考えてから、

「アイドルの曲だよ」

それだけ。再び耳にはめ直して自分の世界に戻っていった。

「なんて曲？」

もう一度、問いかける。

今度はおへそを彼に向けて、より聞く体制を整えて。

彼は少しだけ鬱陶しそうだったけれど、それ以上にどこか萎縮した様子だった。

「言ってもわからないと思うよ」

「なにそれ、言わなきゃわかんないじゃん」

それがほんのりと拒絶の色を交えていることをわかった上で、食い気味に訊く。
強く拒否する理由もなく、彼は応える。

「——だよ」

なにそれ。

「知らない」

当然と言えば当然だ。私と彼とでは音楽の好みなど合うはずもないのだから。

そうして、会話は途切れた。

元々私が一方的に質問してただけなので、私が話すのを止めればもちろん会話は途切れるのだけれど。

スマホで適当に調べる。すぐに曲はヒットした。安部菜々という人が歌っていた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

次の日も、なんとなく話しかけた。

友だちが風邪で休んでいたからだ。

「昨日の曲聞いたよ」

ほんの気まぐれ。特に他意はない。

だけど、彼にとってはそうでなかったようだった。

「…………そう」

素っ気ないフリをしてはいるけれど、誤魔化せない。

眉が動いてしまっている。

面白いのもう少しからかうことに決めた。

「感想、いいの？」

「別に、気にならないし」

「嘘つき。気になる顔してるよ」

「……」

私と反対側にそっぽを向いてしまった。あらら。

深追いはするまいと授業が始まるまで仮眠でもとろうとしたら、蚊の消え入るような声があった。

思わず聞き返す。

「ん？」

「…………ど、どうだったの？」

隣の彼だ。

「やっぱり気になるんじゃない」

「参考にだよ」

面白い子だ。

私は彼の耳元にこっそり教えて上げることにした。

「まあまあだね」

彼はその後気を害してしまったのか、私と目を合わせようとしなかった。

☆ ☆ ☆

一週間後、今度は彼の方から話しかけてきた。

それは数学の授業の前で、私は一人提出する課題を猛スピードで仕上げていた。

「その課題、今日の範囲じゃないよ」

おずおずと、けれどハッキリした声に、私は愕然と彼の顔を見るしかなかった。

「嘘だ」

「本当だよ。今週のはここから」

彼が示すページには確かに先週の日付と先生のはんこが押してあった。

「マジじゃん」

なんてことだ。これは、大変な間違いを犯してしまった。

大幅な時間のロスと、これ以上はロスできないという思いが素早い行動につながてくれる。

すぐさま今週分にとりかかる私に、珍しく彼から話題を提供してくる。

「先週何やってたのさ。ちゃんと提出してないでしょ」

「たはは、手厳しいな。今週で追いつくからいいの」

「……ほどほどにしておきなよ。僕らももう三年生なんだから」

ふと、手を止めて彼の顔を見る。

三年、か。

「君は進学するの？」

彼は私よりはよっぽど勉強が出来た。

私ですら親から言われるまでもなくなんとなく進学するんだろうなと考えているのだ。彼はもう具体的にどこどこ大学へまで考えていてもおかしくない。

けれど、この問いかけに彼は少しの間を空けて、

「まあ、そうだね。ほどほどかな」

彼の言葉の意味がわからずに、私は結局課題を終わらせられなかった。

☆☆☆

夏休みに入る頃には、私は彼と少し話すようになっていた。

夏休み前の空気が私は好きだ。学校という制限から解放されて長い休暇に入る人達

の表情には、多かれ少なかれ楽しみの色が見える。それが好きなのだ。

けれど、彼は夏休みにちっとも浮き足立っている様子はない。いつも通りすました様子で机に向き合っている。ぱっと見は面白みのない人だ。

担任の適当な話の後、友だちと話す前に彼へ声をかける。

「夏休みだね」

「といつても、僕は補習で明日も学校だけどね」

「やれやれ、彼は何もわかっていない。」

「私はかぶりを振って机に腰掛けた。」

「夏休みという事実が大事な。雰囲気、ムードってやつ。わかんないかな、君には」

「おあいにく様、わかんないんだごめんね」

「まったく悪いともごめんとも思っていない軽口。」

ほんのり顔を赤らめながら話すのが彼らしいと、最近わかるようになってきた。

「千春ー、帰ろー」

教室の入り口からお呼びがかかった。

振り返って返事をする。

「今行くー。じゃ、そういうわけだから、また新学期に」

「補習サボるの？」

「様式美だよ。じゃあね」

ウキウキ足取り軽く席を後にする。

彼は机に向かつて勉強を始めた。

これが私と、彼の関係だった。

☆ ☆ ☆

彼は補習に来なかった。

私と彼が補習で会うことはついぞなかった。

☆ ☆ ☆

担任から、彼が転校したと聞いた。

親の事情だとかで、海外へ行つたらしい。

隣の席はぼつかりと穴が空いたようだった。

私と彼は特段仲が良かったわけではない。

たまたま高校の三年の時に、たまたま隣の席になって、たまたま少し話しただけ。

ほんのちよつと人生が交差しただけの関係で、それ以上でも、それ以下でもない。

彼がいなくなつても、私の生活は変わらない。

寂しいという思いは、存外わかかなかった。思ったよりもなんでもないことと受け取っている自分が、少し冷たいのかななんて考えて、ちよつとだけ嫌になった。

「またねって言ったのに」

果たされなかった約束だけが、宙を漂って消えた。

☆ ☆ ☆

安部菜々が一位になったというニュースを、町中で見かけた。

私は大学生になって、彼氏も出来て、色んな経験を積んだ。

聴く音楽も変わって、付き合う友人のタイプも変わった。

それでもふと、町中のテレビから知ったそのニュースに、高校時代に見た彼の面影が浮かんだ。

きつと彼も変わっているし、もう二度と会うことはないのだろう。

彼を好きだったわけでもない。

けれどどうしてだろう。彼の面影が浮かんで、ほんの少しだけ懐かしく、嬉しくなったんだ。

夏の風が頬の横を通り抜けていった。

岩下かおる

君との長い電話を切つて、一人ぶらりと、夜の街へ繰り出した。

随分色んな話をしたけれど、要約してしまえばたった一言に収まつてしまう。

「サヨナラ」

コンビニでタバコを買つた。君と付き合つて以来吸つていなかったから、多分二年ぶりの喫煙になる。

最近喫煙者は肩身が狭い。車の中にヤニの香りを残しているだけで、少し眉根を寄せられてしまう。まして、目の前で吸おうものならば、非国民のレッテルを貼られ火あぶりにされる——勢いで非難される。

タバコを初めて見たのは、近所に住む大学生のお姉さんだ。彼女は誰もいない公園でスパスパやつては、通りがかつた主婦に文句を言われていた。

憧れる要素なんて今思つても何もないけれど、なんとなくカッコいいなと思つてしまった。

はじめてタバコを吸つたのは高校三年の時。誰にも内緒で、喫煙所のシケモクに火をつけて啜えてみた。臭くて、苦くて、とても味わえた物じゃなかった。けれど、どうし

てだろう、タバコへの憧れは増していった。

大学生になって軽いものなら吸えるようになって、初めての恋人が出来てしまった。君はヘビースモーカーで暴力を振るう父親が大嫌いで、だから、タバコも嫌いだった。タバコを捨てた後は、代わりにガムを噛むようになった。けれどついに、ガムは好きになれなかった。アゴは疲れるし、美味しくもない。けれどガムを噛んでいる横顔を、君は素敵と言ってくれた。

すこしだけ、気が引けた。

君がサヨナラと言った意味はなんだっただろうか。自分自身に悪いところが全くなかったなんて、そんな愚かな思い違いはしない。

君は几帳面でズボラな自分とは正反対だった。料理も出来ないし、洗濯も回せない。家の事がなにひとつ出来ない自分は、どうしようもなく「らしく」ないのだろう。

けれど、君がサヨナラを言った理由はそこにないような気がした。

根拠なんて何も無い。

一方的な思い込みだけけれど、そう思ってしまったのだ。

商店街を練り歩いて、少し外れにある行きつけの定食屋に顔を出す。

店主は何も言わずにレモンサワーを出してくれた。下戸だと知っているから、アルコールは控えめに。

焼き鳥を二、三本つまみながら、気分が上がりなかつたので早々に席を立った。

店を去る直前にふと耳をすませると、可愛らしい女の子が歌うポップスが聞こえた。雰囲気が変わったなんて思った。

☆☆☆

「のの子、このCDでよかったのか？」

「ウサミンって言えば、それなんだって」

親子が楽しそうにすれ違う。ふと、この二人に君の姿を重ねている自分に気がついた。

今時重いかもしれないが、交際すれば結婚をする、なんて価値観を持っている。

君にそれを打ち明けこそしなかつたが、もしかしたら感づかれていたのかもしれない。重いか思われてたら嫌だな。

結婚は素敵だと思う。

自分の人生をラインで見通したとき、君との家庭が思い描けた。

今は雲のように消えてしまったけれど、君はそういつもりじゃなかつたのかもしれないなんて。

服屋の前を通りかかって、ショーケースに飾られるウエディングドレスに目を奪われ

た。

純白のそれが、今日に限ってやたらと眩しかった。

『ウエディングドレス、やっぱり憧れる?』

『そりゃあ、ね。なんだかんだ言っても、こういうの女の子に生まれたら、憧れるもんだよ』

君と交わした会話がフラッシュバックする。

あの頃は無邪気に君との未来を信じられた。きっと叶うだろうと、疑ってすらいなかった。

そんな未来はもう訪れない。君が今度出会う誰かは、きっと自分じゃないんだろう。街を眺めれば君との足跡が残っていて、少しだけ、ほんの少しだけ、泣きたくなる。

☆ ☆ ☆

「今日のゲストは、人気ファッション雑誌、nana.の大人気企画『おしやれブランドシリーズ』で、大ブレイク。そのファッションセンスももちろん、今や実力派女優としても有名な桃木もかさんです」

街頭テレビの下に人だまりが出来て賑やかだ。彼ら、彼女らの目的は、考えるまでもなくいま画面に映っている女優だろう。

ぼんやりと画面を見つめてふと、彼女のことを君も好きだったなんて思い出した。あれは、いつだったろう。

そう確か、日曜のリビングでテレビを見ている時だ。

君は昼間つから居間でゴロゴロと寝転がって、スナック菓子片手にテレビを見ていた。

ずっと同じ子ばかり見ているので、ついつい好きなのかと訊ねたのだ。

特に深い意味はなかったが、君は堰を切ったように語り出して止まらなかった。

基本的に他人の話を長々と聞いているのは好きではない。

自分に興味のないことならなおさらである。

だというのに、不思議と君の話は聞いていられた。

理由はわかつている。好きだからだ。

好きというのは実に不可解な現象だ。家族や友人にも抱く感情で、全世界に共通する普遍的なもの。だというのに、ある時、ある人にだけ、どうしようもなく好きな瞬間が生まれる。

この好きは、他の好きとはまったく違って。もつと心の奥深くから生まれてくるような、言葉に出来ない自分だけの強烈な情。

時に自分に信じられないほどの活力を与え、そして今のようにどうしようもない無力

感をももたらすもの。

この感情に振り回されたら最後、しばらくはまともでいられなくなる、いわば、病気にも似たもの。

ああ、と言うことは、自分はどうしようもなく君に恋をしていたのか。

今更になって、改めて悟って、少しスッキリした気分になって、くすぐつたい。

☆☆☆

本屋さんにぶらりと立ち寄る。

お気に入りの歴史小説家の新作をとろうとして、ふと隣にあるポップが目に入った。

——安部菜々。

聞き覚えのある名前だ。どこかであったことがあるのだろうか。

頭をひねって考えるも、出てこない。

けれど、確かに記憶の片隅には存在していて、一体誰なのだろうと気にしている間に、町が夜の空気に包まれてしまった。

急いで外に出ると、もうすっかり星々が顔を覗かせており、思わず仰ぎ見た。

「あ、夏の大三角」

デネブ、アルタイル、ベガ。

星に興味のない自分が、唯一覚えた三つの星。

君が教えてくれた小難しい逸話や、複雑な星座たちもぼんやりと覚えている。

たしか、あの砂時計みたいなのがオリオン座。あつちの弓みたいなのがくちよう座。たった二つのアレが、子犬座だったつけ。

家に君の残した星座早見盤がまだある。

それだけじゃない。歯ブラシも、クシも、ゲームのソフトも。君が置いていったものがまだあの家には残っていた。

捨てるに捨てられなかったのだ。

いや、捨てようとするしていない。まだ、大事にとってある。歯ブラシなんかは捨ててしまっても、もういいよね、なんて。

今の自分はどうしようもなくセンチメンタルだった。

☆ ☆ ☆

帰り道に付こうとして、大学生らしき女の子たちの会話が聞こえてきた。

「そう、安部菜々つていうの。結構良い歌、歌うんだよ」

「へえ、意外。千春つて案外そういうの聞くんだ」

「いや、ちよつと昔にね」

「あ、なに今の気になる反応。なんかあるんでしょ」

「ないって何にも——」

安部菜々、そうだ、歌を歌うと言うことは、歌手かなにかか。ともかくそうだった、タレントだった。

多分、君が語った推しの中に、その安部菜々がいたのだろう。

けれど、その時の君の顔が思い出せない。

どうしてかわからないが、思い出せないのだ。

信号待ちをしている間も、歩道橋を渡る時も、結局ずっと考えていたけど、自力では思い出せずに気がつけば家の近くの商店街まで戻ってきてしまっていた。

「あ、タバコ、家に灰皿ないや……」

ふと、そんな事を呟く。

Uターンして、百均へ向かう。

灰皿はおまけだった。

☆ ☆ ☆

これは恋の話。

どうしようもない失恋の話。

当たり前に人を好きになって、当たり前に別れて。

劇的でもなんでもない、ありふれた日常にまぎれてしまうような、凡百の恋の話。別れてしまった今、この恋の話は終わった。

始まったときから終わっていた。

けれど、後ろ髪を引かれてこの先を歩き続けていくのは嫌だから。

たった少しの立ち直りとして、エピソードを語りたくなってしまったのだ。

つまりこれは自分の恋のエピソード。

打ちのめされた一般人に起きた、ささいで奇跡的な出会いの話。

☆ ☆ ☆

適当に買った灰皿が入ったレジ袋をぶら下げて、再び街頭テレビの所まで戻ると、人だかりは散ってしまった。

テレビは当たり障りのない車の広告を流しており、見る価値もなくなってしまう。る。

「あの、くんぼんは」

すると、背中に声がかかった。

可愛らしい女の子然とした声だ。

振り返るとそこには、背の低い女性が立っていた。

目鼻立ちが整っていて、ぱつと見ただけでもそのオーラの違いが手に取るように理解出来るしまう。

芸能人かな、と手元に視線を落とすと、それらしきマイクが握られていた。

「街頭インタビューをしているんですが、お時間よろしいですか？」

派手な衣装から見るに、この人はアイドルだろう。

それにしてもは礼儀のなっている人だと思う。社会でキチンと揉まれた、立派な社会人。

「かまいませんが」と答えると、彼女は本当に嬉しそうに笑った。

そこで、「頭を過ぎった名前。思い出す。

「ウサミン——」

そうだ、ウサミンだ。

今思い出したのは、彼女の愛称であるウサミンという名前。だが、それは彼女を呼んだ言葉ではなく自分の頭のもやもやに解をつけた言葉だった。

そうだった。君が推していたその人は、ウサミンというアイドルだった。

「ありがとうございます！ ウサミンという名前で活動してまして……」

「ああ、テレビでよく見えますよ」

思ってもないことを。自分はあまりテレビを見ないのだ。

すると、ふとウサミンが自分のレジ袋を眺めているのに気がついた。

そういえば、今自分は灰皿を買ったばかりだった。

慌てて取り繕うと口を開き欠けたところへ、ウサミンが、

「タバコ、吸うんですね。素敵ですね」

多分、彼女は他意なく言っている。喫煙を推奨するわけでも、お世辞を口から飛ばしているわけでもない。

それがわかってしまうから、思わずそっぽを向いてしまった。

インタビューはすぐに終わった。

帰り道、ウサミンの顔を思い出して、溜まらず眩く。

「君が好きになるわけだ」

君への執着はどこかへ飛んでいった。